



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	錦蛇の壁蝨に就て
Author(s)	山下, 次郎; YAMASHITA, Jiro; 森, 樊須 他
Citation	北海道大學農學部邦文紀要, 2(3), 158-159
Issue Date	1955-10-31
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/11607">https://hdl.handle.net/2115/11607</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	2(3)_p158-159.pdf



# 錦蛇の壁蝨に就て

山下次郎\*・森 樊 須\*

On a tick of *Python reticularis* SCHNEIDER

By

Jiro YAMASHITA\* and Hans MORI\*

(Zoological Institute, Faculty of Agriculture, Hokkaido University, Sapporo, Japan)

昭和 29 年 6 月札幌に於て動物博覧会開催中マレーニシキヘビ *Python reticularis* SCHNEIDER が斃死し、解剖の結果数種の内部寄生虫特に 11 隻の舌虫が発見され、これらに就ては既に公表したが、同時に外部寄生虫としてダニ 1 個体を採集した。このダニは ♂で、検査の結果 *Aponomma* 属のものであることが判明した。本種は熱帯地方の爬虫類に特有のもので、爬虫類の鱗片下に潜入して吸血する習性を有する。本種は未だ我国に於て記載された報告を見ない。依てここに本種の形態を記して参考とし度い。

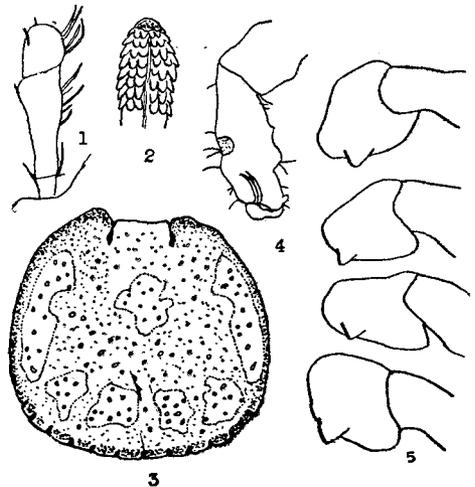
なお宿主錦蛇は斃死の数箇月前にマレーから輸入されたもので、本ダニが彼の地に於て既に寄生していたことは当然考えられる。又今回の発見は ♂のみであり、♀の形態は不明であるから、属名のみ止め、種名の確定は差控え度い。

## 形 態

体は 2.4×2.6 cm で、幅は長さより稍々広く、背甲板は黒褐色を呈し、表面には銀白色の汚点と大小不同の細坎が全面に散在し、眼を欠く。背甲板の銀白色模様は左右略々相称的に肩部から体の後方に伸びた内側に凹部を有するものと、これらの両後端部の中間、背甲板の後縁花彩上部に沿つて存在する 4 個の略同大の不整形模様と、更に中央より稍々前方に位置する 1 個の不整形模様とが認められ、何れもそれらの部位に黒褐色の大小の細坎が点在する。

腹面は乳白色を呈し、生殖孔は第 2 基節の中間、正中線上に横裂して存在し、性溝は後方にゆくに從つて拡がり、外方に開く。肛門は第 4 基節後縁より後方、正中線上にある。気門板はレトルト状を呈し、後方背面に僅かに達し、その表面は黄白色の小粒子を以て埋

まる。気門は気門板の広幅部中央に存在し、隋円形を呈する。



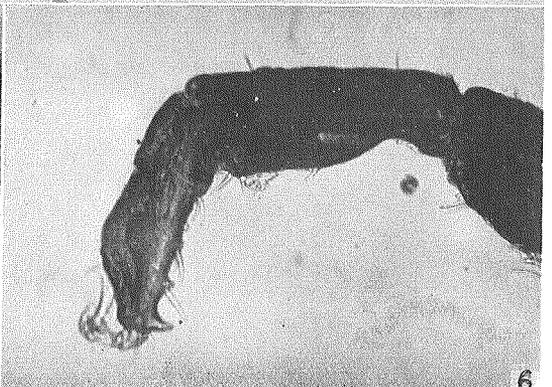
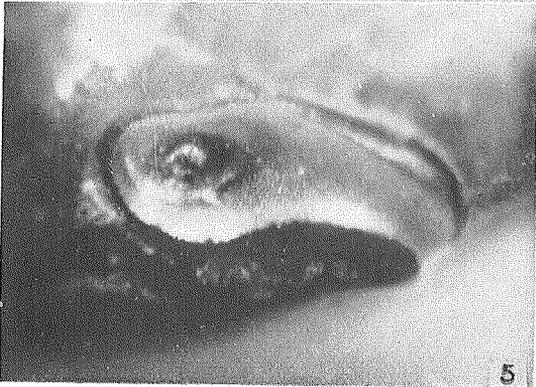
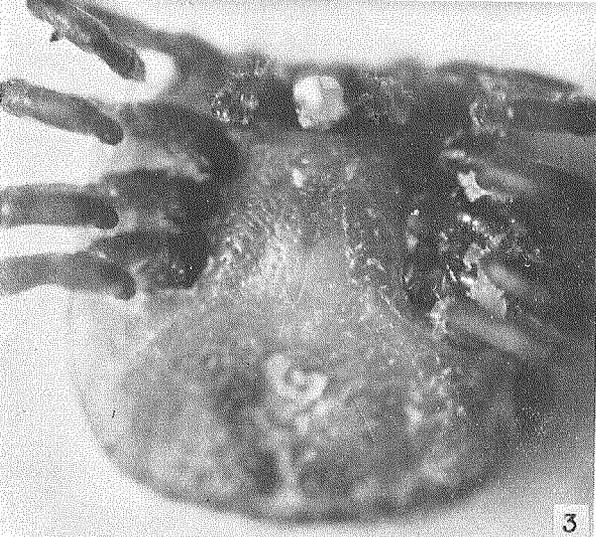
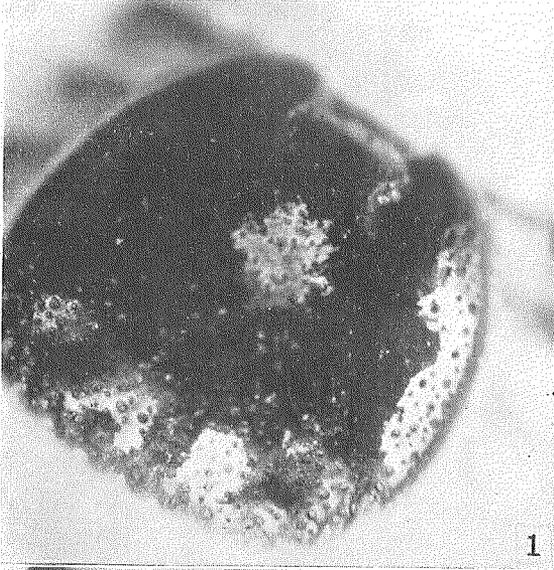
1. 触鬚背面 2. 下顎 3. 背甲板  
4. 第 1 歩脚の附節 5. 基節

第 1 図 *Aponomma* sp.

吻基は背面亜五角形を呈し、触鬚は長く、恰も *Amblyomma* 属に近似する。その第 2 節は第 3 節より遙かに長く、その長さは幅の約 3 倍で、前方にゆくに従い幅広く、第 3 節は先端丸味を有し、長さは略々幅と同じ。第 1 節及び第 4 節は短小である。第 2 節及び第 3 節は何れも 4~5 本の小刺を有する。下顎は 3|3 の歯列を有し、1 列には各 8 個の歯を有する。各歩脚の基節は略々同大で、夫々 1 個の距を有するが、第 1 基節の後縁は他の基節より狭く、恰も 2 個の距を有する如く見える。各歩脚の腿節は最も大きく幅の約 2 倍を有し、転節の長さは幅の約 1.5 倍、脛節は腿節より幅狭く、その長さは幅の約 2 倍である。附節

\* 北海道大学農学部動物学教室

图 版



の前端上縁は急に傾斜し、先端には褥盤を具え、且つ2個の長大な鎌状の爪を有する。第1歩脚の付節にはハラー氏器管が明瞭に認められる。本種の体形が極めて扁平なことは宿主の鱗片下潜入に適応したものであると云われる。

上記の形態は明かに本種が *Aponomma* 属のダニであることを示すものであり、茲に著者等はマレーニシキヘビから得たダニを *Aponomma sp.* と同定した次第である。本種の分類学的位置は次の通りである。

Order Acarina 蟎目

Family Ixodidae 真蟎科

Subfamily Amblyommatinae 雲母真蟎亜科  
(キララマダニ亜科)

Genus *Aponomma* 大幅真蟎属

## 文 献

- 1) SCHULZE, P.: Neue und wenig bekannte Arten der Zeckengattungen *Amblyomma* und *Aponomma*. Z. f. Parasitenk., 4, 459. (1932).
- 2) ———— : Ueber eine Zeckenausbeute von Kleinsäugetern aus Java. Ibid., 7, 167. (1934).
- 3) ———— : Zur Kenntnis der Zeckengattung *Aponomma* Neumann. Zool. Anz., 112. (1935).
- 4) ———— : Neue und wenig bekannte Amblyommen und Aponommen aus Afrika, Südamerika, Indien, Borneo und Australien

(Ixodidae). Z. Parasitenk., 8, 41. (1936).

- 5) WITTICK, R. J.: On some ticks belonging to the genus *Aponomma* and *Amblyomma*. Parasitology, 31, 434. (1939).

## 図版説明

*Aponomma sp.*

1. 背甲板 (左側模様は光線の関係で不闡明)
2. 顎体部
3. 全体腹面
4. 同上拡大
5. 気門盤
6. 第二歩脚前体部 (特に蜷節の形態を示す)

## Résumé

A specimen of the tick has been obtained from the reticulated python, *Python reticularis* SCHNEIDER, which has been imported from Malay and kept by a circus for several months.

This specimen is a male, and the body size is 2.4 mm in length and 2.6 mm in breadth. In this paper the morphological character was described, the species being identified as *Aponomma sp.*

This genus is parasitic under the scales sucking the blood of reptiles in the tropics. Now we are reserved to determine the specific name, for we have no female of this tick. There is no doubt that the snake has been already infected in Malay.